

土木技術者同士の結婚・子育て

平野 理沙

東亜建設工業(株) 横浜支店土木部 土木課



平野 理沙 氏

HIRANO Risa

東洋大学大学院工学研究科 環境・デザイン専攻博士前期課程 修了。東亜建設工業(株)に入社。防波堤築造工事に従事していたときに妊娠。出産後は横浜支店の土木部で勤務。

働き方改革など近年の働き方は変化している。その変化の流れの中でも仕事と育児の両立は、ワーク・ライフ・バランスの実現における大きな課題ではないだろうか。男女が共に働く社会に焦点を当てた本連載の第70回では、夫婦で協力しながら、出産・子育て、そして仕事に向き合う女性技術者の働き方を紹介する。

進路を決めた場所で働く

母の両親がいる岩手県陸前高田市に夏休みを利用して遊びに来ていた高校2年生のとき山道を一人散歩しながら「進学して土木を勉強しよう」と進路を決め、工学部の土木学科に進み、建設会社に入社した。入社して3年間は本社配属で、4年目に現場配属となった。河川の浚渫(しゅんせつ)やケーソンの製作、LNG 棧橋基地改造工事を経験した。

現場は、本社勤務と違い天候に左右されるため、天気や海象予報をチェックしながら作業内容を適宜変更する。長期休暇前までには終わらせたい作業などを職長と相談して工程を決める。未熟ながらも現場ならではの仕事の進め方が楽しかった。入社7年目に東北支店へ異動し、東日本大震災で津波の被害にあった岩手県陸前高田市の防潮堤築造工事に施工管理者として配属された。小学生のころから毎年夏休みに訪れていた思い出の場所が様変わりした悲

しさと同時に慣れ親しんだ場所の復興に携われるうれしきを感じた。現場が、祖父母の家から遠く眼下に見下ろす場所にあり「あの辺りで仕事しているよ」と伝えられたこともうれしかった。

防潮堤築造工事の途中で、応援として横浜港の本牧沖で灯浮標の製作・設置工事の担当となり、現場代理人と監理技術者の兼務時に結婚した。

単身赴任中の妊娠

妊娠が分かったとき、同じ会社で働く夫は施工管理者として宮城県仙台市の現場におり、私は、岩手県久慈市で久慈港の防波堤築造工事の現場代理人として単身赴任中だった。

夫には電話で伝え、その後に所長に妊娠した旨を報告した。動揺したり、慌てたりしない所長が、少し戸惑ったようにも見えたが「おめでとー」という言葉と今後の働き方について私の意見を尊重してくれた。しばらくは出勤できたが、切迫流産の恐れありと診断され自宅安静が続く約2カ月現場を休んだ。夏季休暇が近く、夫が仙台市から身の周りの世話のために久慈市まで来てくれた。約1年ぶりに同じ屋根の下で一緒にご飯を食べたり、健診に送ってもらったりと夫と過ごす時間ができたのは、うれしかったし心強かった。

現場とは違った達成感

出勤できるようになってからは、



写真1 重機好きに育っている息子と

事務所での勤務をメインにしてもらい、現場代理人も変更いただいた。

会社の取り計らいで夫のいる仙台市に引っ越したが出産まで自宅安静となり、一度も出勤せず出産を待つことになった。有休を全て消化したが、「年次有給休暇復活制度」で過去に消化できず消失した有休を使うことができ、とても助かった。

出産まで後2カ月というタイミングで1カ月入院となり、長期間会社を休んだのに、無事生まれなかったらどうしようという考えが止まらず、入院中はとてもつらかった。

無事息子が生まれたときは、今まで感じたことのないうれしさと安心感、痛さを味わった。出産報告を家族と所長にできたときは、現場とは

違う達成感と安堵あんどを感じた。

夫の育休と単身赴任

夫は、息子が生まれた月から約2カ月強の育休を取得し、家事はもろろん、息子のお風呂やミルク、おむつ替えなど全てをこなしてくれた。その後、夫が復職し、秋田県に単身赴任が決まった。

首がすわり始めた息子の24時間週5、6日のワンオペは、フルハーネスを1日装着したLNG棧橋基地改造工事より肩と腰が痛く、日の出から船に乗り日の入り後も働いた防潮堤築造工事より気持ちが休まらなかった。

週末に帰省する夫から現場の話を聞くたびに現場も大変だな、けれど充実してうらやましいなと思った。

夫の二度目の育休

帰省のたびに夫から現場の話を聞いていたため、おおよその現状と人間関係が把握できるようになり「自分だったらどうするか」と考え始め、だんだんと現場に復職したい気

持ちが大きくなっていった。

夫の単身赴任が半年になるころ、夫に息子が1歳になったタイミングで復職したいこと、二度目の育休を取ってほしいことを伝えた。息子が1歳になったタイミングで東北支店に内勤として復職し、夫は二度目の育休を取得した。1年半ぶりの出勤がともうれしく、戻ってきた…と感じたのを覚えている。

夫も私もそれぞれ、異動が決まっており、復職した2週間後には横浜市へ引っ越した。1歳児のいる長距離の引っ越しは大変だったが、なんとか社宅に着き現在に至っている。

復職と共働き

異動先は、希望の現場ではなく横浜支店の内勤だったが、体力的な不安もあり最初の1年間は「所定外労働の免除申請」を提出し勤務していた。内勤として現場で使用するソフトのライセンス管理やネットワーク環境の改善などの業務を担当し改めて一現場にたくさん部署が調整することを知った。

社宅のある地域は、保育園の激戦

区で申し込んだ社宅付近の保育園は全滅だった。勤務地付近までエリアを広げた結果、偶然空きの出た保育園に決まり、無事2歳で入園できた。

今では朝と帰宅後の時間が勝負な毎日を送っている。保育園への送迎は主に夫が担当し、私は定時にあがり夕飯の準備をしつつ二人の帰りを待つ…という日もあれば、残業して帰宅したら夕飯ができて…という日もある。夫が送迎できない日がある週は、フレックスタイム制で出勤時間を自分で調整し勤務している。社宅の1室がサテライトオフィスのため、息子が体調不良などなどに在宅勤務ができとても助かっている。

息子が生まれて、会社は代わりの方がいるが、子どもや家族のことは代わりがないと思うようになってきた。責任を持って仕事を全うすることとは大事であるし当たり前だが、それと同じくらい家族との時間を大事にしたい。子育ては、今だけの大切な時間だと感じている(写真1)。

だからといって仕事をおろそかにせず、仕事と子育てを両立し成果を出せるよう日々努力していきたい。

(担当編集委員…工藤正智)